

# 山頭火ふるさと館報

第11号  
令和5年10月

## 永平寺を訪ねて

一般社団法人防府観光コンベンション協会  
山頭火ふるさと館  
館長 中村 浩典

山頭火は、「其中庵」時代に、長期にわたる旅に二度出ています。一度目は、上伊那で自分に似た人生を送った井上井月の足跡を探ろうとした旅でした。しかし、このときは伊那を目前にして急性肺炎で入院し、墓参できないままに帰庵してしまいます。二度目は、昭和十年十二月に出発した、尊敬する先人である松尾芭蕉や良寛らの遺跡をめぐる旅でした。これは山頭火が晩年に命を削りながら行った大旅行であり、死に場所を探す旅でもありました。この長旅で最後に立ち寄ったのが永平寺であり、七月四日から八日までの五日間参籠しています。山頭火はこの参籠で、「だらけきつた身心がひきしまつて、本来の自分にたちかへつたやうな気分になつた」、「新山頭火となれ、身心を正しく持して生きよ」等の言葉を日記に残すとともに、「てふてふひらひらかをこえた」という句を詠んでいます。この句は、永

平寺法堂の高い薨を力強く越えて飛んでいく蝶の姿を目の当たりにしながら、自分の道をまっすぐに進んで生きていく決意を表現したものとされています。

今年七月、山頭火がこの句境に至った永平寺を訪ねてみたいと思ひ立ち、足を運んでみることにしました。言うまでもなく曹洞宗の大本山であり、観光客のみならず多くの修行僧が全国から集まつており、法衣を纏って熱心にお勤めに励む姿がありました。

北陸の静寂な山奥にどっしりと構える伽藍は、まさに荘厳という表現がふさわしく、格の高さを感じました。また、緑豊かで昔生じた参道を歩くと、樹齢約七〇〇年といわれる老杉の巨木が立ち並び、その中に山頭火句を刻んだ句碑を垣間見ることができました。堂内に入ると座禅も体験でき、警策で背中を打たれることで心が研ぎ澄まされるような感覚を覚えました。

「解くすべもない惑い」を背負いながら行乞流転の旅を続けた山頭火にとって、永平寺での五日間の参籠は、執着心から自分を解放し、自分らしく生きることへの転機を生む時間になったものと思います。この長旅を終え帰庵したときに、山頭火はこの旅でしっかりと「自分のこれからの道」を見つけたと感じられる記述を残しています。

禅の修行道場として凜とした空気に包まれた永平寺への訪問を通じて、晩年の山頭火

### 目次

館長挨拶	1
企画展 俳句を聴く	2
企画展 山頭火とオノマトペ	2
企画展 山頭火に出会った人々第2弾	3
兼崎地橙孫と木村緑平	3
寄稿 山頭火と地橙孫	4
戸田勝絵画展	5
収蔵資料紹介	5
今後の企画展情報	6
今月の一句アーカイブ	7
図書・資料受け入れ報告	7
イベント情報	8

の足跡に触れることができ、印象深い旅となりました。

話は変わりますが、現在、企画展「山頭火に出会った人々 第二弾 兼崎地橙孫と木村緑平」を開催しています。十月六日からは後期展示に入り、生涯精神的・経済的に山頭火を支え続け、山頭火が最も頼りにしていた木村緑平を取り上げます。各種資料を通じて山頭火との深い友情をご覧いただければ幸いに存じます。

結びに、今後とも山頭火ふるさと館への変わらぬご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。巻頭のご挨拶といたします。



句碑「てふてふひらひらかをこえた」(永平寺) ▶

企画展  
俳句を聴く  
山頭火とオノマトペ

開催期間 令和五年四月十四日(金)  
～七月二日(日)



山頭火の自由律俳句は、五・七・五という音数による韻律はないものの、日本語の「音」を効果的に使ったリズムを生み出している句や、より感覚に訴えるような句が多く存在します。今回の企画展では、山頭火の俳句のうち、オノマトペをはじめとする音にこだわって詠まれたものを紹介。山頭火の句を通じて日本語の音の面白さを味わっていただきました。また、展示室ではQRコードを読み取ってスマートフォンで俳句を聴いていただきました。

一、オノマトペとは

オノマトペは、日本語では擬音語や擬態語とも言われます。

日本語学会編『日本語学大辞典』(東京堂

出版・二〇一八)には、オノマトペの定義として「外界の物音や状態を言語音で模写した言葉」とあり、さらに「一般語よりも人間の感性や感情に訴えかける力が強く、追真的描写力を持つ」と説明されています。

また、オノマトペの形を見ると、反復、促音(そくおん)、撥音(はつおん)等が使われており非常にリズムミカルです。

オノマトペは、感覚的であり、音楽的な言葉だと言いうことができます。

二、音が象徴するもの

オノマトペは、音によって感覚的にその状態や様子を伝えます。たとえば

「ひっそり咲いて散ります」

の「ひっそり」は静かな様子を表していますが、それは「ひそ」という音によって伝わっています。

この「ひそ」という音は、まさに「静かな感じ」がするのではないのでしょうか。その感覚は、「ヒ」

「ソ」の発音と関わりがあると考えられます。

このような音による象徴は、オノマトペが得意とするところです。山頭火自身も句作の際に「語音感」というものを意識していました。

三、音と意味の境界

オノマトペは、言語音を使って感覚的に描写をする語ですが、中には、「意味」の領域と「音」による描写の領域があいまいなものもあります。

たとえば動詞「たわむ」(「タワム」という音とは無関係に、枝などが重さで弓なりに曲がることを表わす)とオノマトペ「たわわ」(木の枝が「たわむ」ほど多くの実がなっているさまを、「タワワ」という音によって表わす)、この二語

は意味的に重なるところがあります。オノマトペ「たわわ」は、音による描写であると同時に、「たわむ」の概念的な意味も含んでいると言えます。

【展示資料一覧】すべて当館蔵

第六句集『孤寒』(種田山頭火・昭和十四年)／第四句集『雑草風景』(種田山頭火・昭和十一年)／第三句集『山行水行』(種田山頭火・昭和十年)／『層雲』第二五卷第二号(層雲社・昭和十年六月)／第二句集『草木塔』(種田山頭火・昭和八年)／『層雲』第一二卷第一号(層雲社・昭和七年三月)／短冊額装「ほろほろ酔うて木の葉ふる」(種田山頭火)／掛け軸「ぼろぼろ流る汗が白い函に」(種田山頭火)／第五句集『柿の葉』(種田山頭火・昭和十二年)／『層雲』第二三卷第一二号(層雲社・昭和九年四月)／短冊「笠へぼつとり椿だつた」(種田山頭火)／『層雲』第二五卷第一号(層雲社・昭和十年五月)／第七句集『鴉』(種田山頭火・昭和十五年)／掛け軸「もりもりもりある雲あゆむ」(種田山頭火)



▲展示風景



企画展  
山頭火に出会った人々  
第2弾  
兼崎地橙孫と木村緑平

前期展示  
会期 令和五年七月七日(金)

〜十月一日(日)



漂泊の俳人と言われる種田山頭火には、多くの友人がいました。今回はその中でも、山頭火が自由律で頭角を現し始めたころに出会った人物二人を紹介します。前期には、同郷の俳人として俳句を通じて交流を続けた兼崎地橙孫を取り上げました。後期には生涯精神的・経済的に山頭火を支え続け、山頭火が最も頼りにしていた木村緑平を取り上げます。

一、兼崎地橙孫

明治二十三(一八九〇)年〜昭和三十二(一九五七)年。弁護士・俳人。  
現山口市生まれ。旧制豊浦中学校在学中か

ら俳句を始め、全国巡歴中の河東碧梧桐に出会い、以後碧梧桐門下となる。熊本第五高等学校(五高)在学中には『白川及新市街(しらかわおよびしんしがい)』を主宰し、山頭火とも交流した。京大卒業後、陸軍省法官部に入るが一年弱で退職し、下関で弁護士事務所を開業する。戦時中に定型俳句に戻り、戦後は郷里徳山で「清明の句」を基本とする句作に励んだ。書は中村不折から学んだ六朝体をよくした。

二、地橙孫の俳歴

地橙孫は明治末期に碧梧桐に出会い、新傾向俳句の道を歩み始めました。その頃山頭火も大道で熱心に句作しており、荻原井泉水の主宰する『層雲』に投稿して新傾向俳句へと進みます。

山頭火がその後も『層雲』に投稿を続け、自由律俳句を生涯作り続けたのに対し、地橙孫は昭和六(一九三一)年頃から碧梧桐主宰の『海紅』から距離を置き、俳誌『生活派』に移ります。さらに戦時中には定型俳句に戻り、かつて碧梧桐門下であった広江八重桜・泉天郎とともに「清明の句」を作るようになります。

三、山頭火との接点

山頭火は大道の酒造場が破産した際、地橙孫のいる熊本に移り住みました。熊本での交際の際は主に、地橙孫が主宰する『白川及新市街』だったと考えられます。

数か月の交流ののち、二人は別の道を歩みますが、お互いに一目置く存在だったようです。山頭火は地橙孫のことを「地橙孫さんは尊敬すべき紳士である、私は俳人としてとなく、

人間として親しみを感じてゐるのである。」(日記 昭和五年十一月二十二日)と評します。一方地橙孫は山頭火について「全く好感がもてる」「彼のみは其逸話と共に句が残るであらう」(『母子草書 俳壇思い出話』)と予言します。

俳句を通じて知り合った二人は、それぞれの信じる俳句をそれぞれに追い求め続けましたが、深いところで認め合っていたのではないのでしょうか。

【展示資料一覧】

- 色紙「孫弟子の凡庸競え頼祭忌」(兼崎地橙孫・兼崎地橙孫頭彰会蔵)／『海紅』第二卷第一二号(海紅社・昭和十二年三月・当館蔵)／掛軸「竹藪幹しめりつめたき月の暈」(兼崎地橙孫・兼崎地橙孫頭彰会蔵)／短冊「家郷また旅の心や草枯るる」(兼崎地橙孫・当館蔵)／短冊「山水の葉色に染まり雨蛙」(兼崎地橙孫・当館蔵)／『清明』創刊号(清明吟社・昭和二十六年・兼崎地橙孫頭彰会蔵)／『層雲』第四卷第五号(層雲社・大正三年八月・当館蔵)／『樹』三一号(河村義介・大正五年三月・当館蔵)／『白川及新市街』復活號(白川詩社・大正八年十一月・山口県立山口図書館蔵)／『白川及新市街』第二輯(白川詩社・大正九年一月・山口県立山口図書館蔵)／『白川及新市街』第三輯(白川詩社・大正九年二月・山口県立山口図書館蔵)／『白川及新市街』第六輯(白川詩社・大正九年五月・山口県立山口図書館蔵)／『中村不折愛蔵版 龍眠帖 復刻版』(中村不折・明治四十一年・兼崎地橙孫頭彰会蔵)／扁額「満山雷雨」(兼崎地橙孫・当館蔵)



▲展示風景

寄稿 山頭火と地橙孫

兼崎地橙孫顕彰会  
会長 兼崎人士

一、山頭火との交流

地橙孫は、新傾向俳句時代から縁あって山頭火と文通していたが、彼に出会ったのは熊本が初めてです。

大道(山口県防府市)での酒造業に失敗した山頭火が、大正五年(一九一六)四月、夜逃げ同様に妻子を連れて、熊本五高に在学中の地橙孫等を頼つて来たときの事です。そして、山頭火一家を熊本へ迎え、学生街の下通り一丁目に家を手配し、さらに古本屋の営業など、生活全般の世話もしていたようです。

下関市本町で弁護士を開業するようになってからも、熊本で別れて以来の間柄・山頭火は、しばしば行乞姿で訪ねてきています。そして一泊し、酒を酌み交わしながら俳句談義に花を咲かせていました。次の句は、山頭火がその時詠んだもの。

寝酒したしくおいてありました

地橙孫はその都度、山頭火に救いの手を差し伸べ、物心両面にわたりお世話をしていました。



▲地橙孫が六朝書で揮毫した「俳人種田山頭火之墓」左は、母フサの墓 防府市本橋町・護国寺の境内

二、和田 健さんの想い出話(地橙孫新聞への投稿原稿より)

※追想・地橙孫

私は地橙孫に一度お会いしたことがある。先生が下関で弁護士をしておられるときの話である。

当時、西日本唯一の総合文芸誌として有名だった『燭台』に、地橙孫と徳山の久保白船は共に同人以上の存在で協力しておられた。私は十六歳で最年少の誌友として参加し、詩を投稿していた。

訪問したのが何年何月とハッキリ思い出せないのが残念だが、一宿一飯の恩にあずかった。当時、種田山頭火は、まったく無名で(こちらが存在を知らなかったのだが)、『燭台』には作品も出していない。

さて、貧しい一文学青年にすぎない私が、どうして地橙孫を訪ねる気になったか、これも今でも分からない。その温容に接し、私は感激したことは間違いない。

後年、拙著『防長文学散歩』を執筆するにあたり、私は徳山に未亡人をインタビューし、地橙孫の数々のエピソードをうかがって、格別懐旧の念にかられたことは、まだ記憶に新しい。

このたび、知友の田村悌夫さんと地橙孫遠戚の兼崎人士さんを中心に、顕彰会が発足したことは、むしろ遅きに過ぎた感なきにしもあらずだが、今からでもいい、文字通り地橙孫の再発掘と顕彰に、お互い尽くすよう努力したいと思う。

「清明」の俳人・地橙孫、山頭火とは対照的と言つてもいい地橙孫を、もっと私たちは身近

に仰ぎたいものである。

和田 健  
平成二十二年(二〇〇八)年十月一日

三、地橙孫の息女・吉田 紗美子さんと山頭火  
大正十五年(一九二六)、父・地橙孫、母・恵美子の長女として下関に誕生しました。地橙孫宅を訪ねてきた山頭火は、幼い紗美子さんを可愛がっていたようです。下関高等学校時代から文学の道を志し龍井孝作に師事。樟蔭女子専門学校を終了後、昭和十九年に吉田満定氏と結婚。作家として文芸誌や「素直」「作文」等の同人誌に、純文学や伝記小説など数多くの作品を発表し活躍しました。

昭和三十四年には、小説『感情のウエイブ』にて第四十二回芥川賞にノミネートされました(この時は最終選考まで残るも該当作家なし)。昭和六十一年には、歴史小説『沢瀉の紋章の影に』で放送文学賞を受賞。平成二十一年、逝去。享年八十三歳。

種田山頭火と地橙孫を描いた『投げ与えられた一銭』が遺作となりました。

紗美子さんは、山頭火のことを次のように述懐していました。

『父・地橙孫が下関で弁護士をしていたとき、山頭火さんはよく訪ねて来られました。そして、酒好きの二人は、深夜遅くまで大酒を飲んでいました。二人の酔っ払いのお世話で、母は大変だったようです。でも、父も母も、山頭火さんの人柄は好きでした。』

# 戸田勝絵画展

会期 令和五年五月一日〜七月二日

防府市出身の画家、戸田勝氏より寄贈いただいた作品を市民ギャラリーにて展示しました。戸田氏は山頭火の句をモチーフにした水彩画を多く作成しており、ほかにも山頭火カレンダーの作成やアスピラート前の句碑デザインも手掛けています。

今回は『防府の生んだ自由律俳人山頭火』挿絵原画を中心に展示をし、やわらかい色彩の水彩画とともに山頭火の句をお楽しみいただきます。

### 【展示資料】

『防府の生んだ自由律俳人山頭火』第五版(防府市文化協会・平成十年)挿絵原画「春風の鉢の子一つ」「早春の防府平野」「山頭火の小径」「当時の熊本市街」「高千穂の連山」「草庵」  
／三三山口「山頭火 今週の一句」原画「あてなくあるく山口の山のようにさ」「ほんに一輪咲いて一輪「雪ふる逢へばわかれの雪ふる」「うどん供へて、母よ、わたくしもいただきます」「春風のお地蔵さんは無一物」「こゝから月ヶ瀬といふ梅橋をわたる」「酒がやめられない木の芽草の芽」「春あを／＼とあつ風呂」「この木もあの木もうつくしい若葉」「OCス、ふるさとからちりはじめた」／エンボス「鳩群れて飛び果てもなう照り映ゆる空」／水彩画「三日月よ逢ひたい人がある」

# 収蔵資料紹介

「霧」題で行われた椋鳥会句会資料を紹介する。

### 凡例

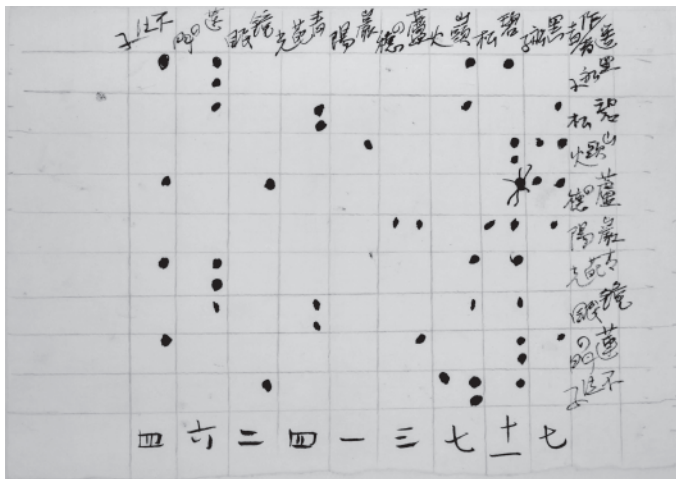
- 一、旧字体等の異体字は現行の標準的な字体に改めた。
- 一、適宜濁点等を補った。

- 1 (削除)
- 2 二階よりの霧の町納豆呼び過げる 不泣
- 3 霧の街行く川添へりのかと尖塔か
- 4 霧に浮く尖塔や町は坂なせる ○山頭
- 5 霧夜越え畏木屋に燐寸尋ね寄る
- 6 途中所見船進水も霧晴れに
- 7 樵り帰る物香に霧の夕灯す
- 8 霧迫る小駅過ぐ急行車心地よき
- 9 演習見に来し知らぬ里霧にコブル畑
- 10 泊り船の帆並越す霧の暮るゝ町灯 ○○青
- 11 島教はるも何見えぬ階廊濃き霧に
- 12 雨後の霧に河口増水月に照る
- 13 霧に籠る崖の茶屋浅黄暖簾せる
- 14 霧に明けて湖辺四つ晴れ期す帆あり
- 15 霧旦川辺過ぐ衣も並み洗ふ ○○青
- 16 殺さで捨つる灯に来し虫や霧の月
- 17 流行歌など帰船待てる磯朝霧が ○蓮
- 18 釣り休む日を酌めり霧砲戸なりもす
- 19 岳を海を刷く霧や二階句座にゐて ○○○松

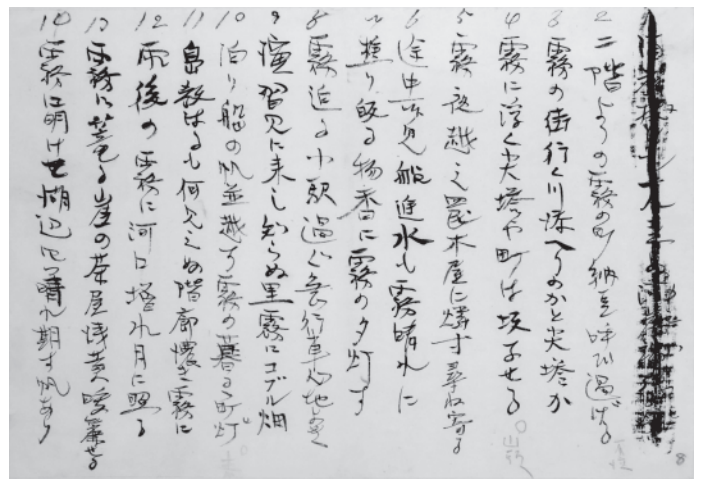
- 20 夜狼霧に山休みいつか火も焚いて ○芦
  - 21 軒の球燈霧の夜をなつかしみ行く ○○不泣
  - 22 教会の鐘が鳴る霧晴れを行く ○山
  - 23 河の洲に干す傘や海門霧晴れつ ○青
  - 24 川澄みし間を濯ぐものや暁霧に ○巖
  - 25 柳伐らばよき□□霧迫る ○○○蓮
  - 26 着替へ寒き霧晨忌明け指せし
  - 27 夜出町の印象も廓灯吹く霧 ○○○黒
  - 28 病華なる黎明を霧に黄なる花 ○芦
  - 29 田扱き稲も霧晨夕旭出に間あれば
  - 30 霧旦の物見立人寒う立つ
  - 31 霧の夜く菊育つなど見るやうな
  - 32 製材所の大杉に深う霧こめて
  - 33 睡眠深き霧の街ヨボが一人行く
  - 34 霧の朝の湖黒み霧もつ草が
  - 35 群に離るゝ寂しさ、さあれ霧踏んで 山頭火
  - 36 霧の朝の散策が珍ら森に来ぬ 不泣
  - 37 霧冷たき額垂れて大野走るわれ
  - 38 楼の山茶花電灯の明り霧こめて
  - 39 発車用意の黒烟を霧に朝となり
  - 40 夕べ着きしが灯早なる霧底の町 ○○○碧
- 錦帯橋所見
- 41 山は霧を吐けり橋見連るゝ朝 ○磐
  - 42 霧寒き川辺宿篋師吹ひ過ぐ ○○○黒船子
  - 43 霧こめし朝の里鶏こゝと鳴く
  - 44 蔓巻く山道の厠霧上る
  - 45 秋夕暈濃き霧に島火花
  - 46 出産見舞うて母と戻る霧夜鳴く狐

採点表 省略





▲採点表



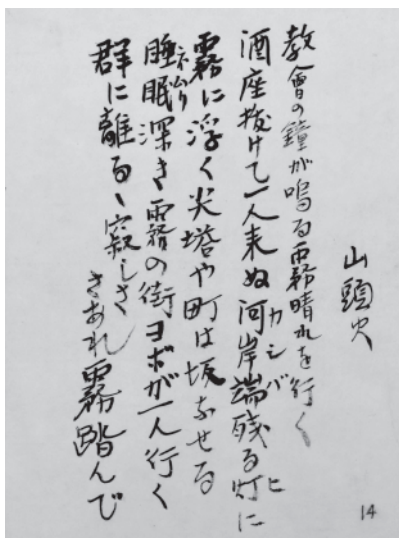
▲句会資料一枚目

解説

防府の俳句結社「椋鳥会」の句会資料。題は「霧」で、大正三年または四年のもの。採点表を見ると作者と選者が同じであるため、席題(句会当日にその場で句を詠むための題)の可能性もある。

参加者は河村黒船子(徳山)、江良碧松(麻郷)、種田山頭火(大道)、蘆の穂(詳細不明)、長野巖陽(麻郷)、地家青葩光(麻郷)、斉藤鐘眠(防府)、梅田蓮の門(防府)、浴永不泣子(防府)の九名。採点表によると碧松が最多で十一票、続いて黒船子と山頭火が七票、蓮の門六票という順になっている。それぞれが五句ずつ詠んでいるはずであるが無記名のもも多く、また○印による点数も採点表と合致しない。

本資料では4、22、35の三句が山頭火の句だとわかる。一方別資料に、山頭火が「霧」題で五句書き付けたもの『五句書付「霧」』があり、そこには右の三句のほか33の句と、「酒座抜けて一人来ぬ河岸端残る灯に」という句が書かれている。「酒座抜けて」は本句会資料をよく見ると削除されている1の句であり、『五句書付「霧」』によって句を提出したものの後から差し替えたのではないかと推測できる。ただ、差し替え後の句は本句会資料では特定不可能である。(山頭火ふるさと館 高張優子)



▲五句書付「霧」(種田山頭火)

今後の企画展情報

企画展「山頭火に出会った人々 第2弾 兼 崎地橙孫と木村緑平」  
後期 令和五年十月六日(金)  
〜 令和六年一月八日(月)

山頭火が自由律で頭角を現し始めたところに出会った人物を紹介します。後期には、生涯精神的・経済的に山頭火を支え続け、山頭火が最も頼りにしていた木村緑平を取り上げ、山頭火との友情を掘り下げます。

企画展「雑誌『俳句研究』と自由律」  
会期 令和六年一月十三日(土)  
〜 四月七日(日)

昭和九年に創刊された『俳句研究』は総合俳句雑誌であり、高浜虚子の『ホトトギス』派を始めとする定型の俳人たちとともに荻原井泉水や種田山頭火等も名を連ねていました。この展示では、昭和十九年までの『俳句研究』における自由律の俳人たちの活躍を紹介します。

# 今月の一句アーカイブ

山頭火ふるさと館では毎月山頭火の句を一句選んで皆様にご紹介しています。これまでにご紹介した「今月の一句」を振り返ります。

令和五年

四月 いのちありて浜名湖は

ウミ  
花くもりのさざなみ

昭和十四年四月

当時住んでいた風来居を出発して旅に出た山頭火が浜名湖めぐりをした際に詠んだ句。「いのちありて」は、風来居からはるばるやってくることができたのも命あつてのことだという意味でしょう。「花くもり」という語は春の曇天を意味します。

五月 水音のクローバーをしく

昭和七年五月

クローバーは茎が地面を這って伸びるため、一面に広がるように生えます。「しく」という言葉は、クローバーがあたり一面に、まるで大きな一枚の布を敷いたかのように広がっている様子を的確に表現しています。

六月 燕とびかふ空しみじみと家出かな

大正五年

大正五年四月、大道の種田酒造場が破産し、山頭火は妻子とともに家を出て熊本に移り住みました。掲句は当時のことを詠んだ句

ではないかと考えられます。巣立ちして春になると帰ってくる燕とは違い家に戻ることのない状況を惜しむ心境が感じられます。

七月 あなたがきてくれるころの

風鈴しきり鳴る(樹明君に)

昭和十年七月

前書きにある「樹明」は国森樹明で、其中庵時代の山頭火を支えた友人の一人です。当時の山頭火の句には彼の来訪を喜ぶ句が何句かあります。掲句も、いつも彼が来る頃合いだが、樹明君はまだ来ないのだろうかとか来訪を心待ちにする心情が伺える句です。

八月 更けて雲からまんまるい月がうらぼん

昭和十五年八月

「孟蘭盆」は陰暦七月十五日に行われる仏事のこと、原義は餓鬼道等に落ちて倒懸の苦しみを受けることを言います。掲句は盆に夜更けの満月を見ながら亡くなった両親を思う、と解釈することもできますが、当時の日本は戦争へ向かつており、贅沢ができなくなった息苦しい世の中を原義を含めて表現しているようにも解釈できます。

九月 雨ふるふるさととははだしであるく

昭和七年九月

小郡で詠まれた句。ふるさと防府に近い土地に来て足の裏で土の感触を感じ、少年の頃を思い出して詠んだ句だと解釈できます。山頭火は防府に対して複雑な気持ちを抱いていたため小郡という、ふるさとまであと一歩の場所だったからこそ苦しい思い出ではなく、明るく希望に満ちた幼い頃の思い出が甦ってきたのかもしれない。

# 図書・資料受け入れ報告

令和五年四月から八月までの間に寄贈いただいた資料をご紹介します。

寄贈

○梅田利枝様より『梅田磐翠宛て葉書』(種田山頭火)他四十五点

○田中健次様より『山頭火の話』(和田健)他四点

○安井秀作様より書額「まつたく雲がない笠をぬぎ」、書額「ひっそり生きてなるやうになる草の穂」(種田山頭火)

御著編書

○「青穂」事務室様『青穂』四十八号、四十九号

○富永嶋山氏『自由律俳句クラブ群妙』第三十四号

○林水福様『行乞的詩人：種田山頭火俳句百首精選』

◆これまでのイベント◆

4月	1日	第5回山頭火ふるさと館フォトコンテスト募集開始（～10月30日）
	30日	戸田勝様作品寄贈感謝状贈呈式
5月	1日	第6回山頭火ふるさと館自由律俳句大会募集開始（～11月30日）
	1日	戸田勝絵画展（～7月2日）
	6日	親子でワークショップ ～りんりんふうりん作り～
6月	14日	自由律句を学ぶ会
	21日	山頭火を学ぶ会
	24日	自由律句で遊ぼう
7月	12日	自由律句を学ぶ会
	19日	山頭火を学ぶ会
	22日	自由律句で遊ぼう
8月	1日	令和5年度山頭火ふるさと館書道コンクール募集開始（～9月8日）
	16日	山頭火を学ぶ会
9月	13日	自由律句を学ぶ会
	16日	トークイベント「山頭火と地橙孫」
	20日	山頭火を学ぶ会
	23日	自由律句で遊ぼう

◆これからのイベント◆

10月	7日・8日	第2回山頭火ふるさとまつり
	7日	令和5年度山頭火ふるさと館書道コンクール表彰式
	18日	山頭火を学ぶ会
	25日	自由律句を学ぶ会
	28日	自由律句で遊ぼう
11月	3日	山頭火句碑巡り&自然観察 ～まちなかの「こんなところに！」再発見～
	8日	自由律句を学ぶ会
	15日	山頭火を学ぶ会
	19日	出張もの作り体験 オリジナルトートバッグ作り【すごいぞ！防府秋の大イベント】
	25日	コリントゲームで遊ぼう

山頭火ふるさと館報

第11号

令和5年10月1日発行

編集・発行

一般社団法人

防府観光コンベンション協会

山頭火ふるさと館

747-0032

山口県防府市宮市町5番13号

電話 0835-28-3107

FAX 0835-28-3113

山頭火ふるさと館のご案内

開館時間

午前十時～午後六時

（ただし、特別企画展の開催中は、展示室への入室は午後五時三十分まで）

休館日

毎週火曜日（祝日の場合は次の平日）

十二月二十六日～十二月三十一日まで

観覧料

無料

※なお、特別企画展を開催する際、観覧料を設ける場合があります。

アクセス

防府駅てんじんぐちから約一・五km

まちなかの駅「うめてらす」から約一〇〇m

山陽自動車道防府東・西ICより約七分

駐車場

普通車用三台、身障者等用二台（ふるさと館横）  
無料観光駐車場二十五台（ふるさと館斜前）